慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	価値表現の両極について
Sub Title	The two poles of the value-expression
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.10 (1948. 10) ,p.555(1)- 572(18)
JaLC DOI	10.14991/001.19481001-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19481001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋誠一郎著

經濟學史略

（新刊）

A五判　價三二〇圓　〒一五圓

「本書は、著者が是れ迄公にした經濟思想史及經濟學史に關する可なりに數多い著作及論稿の中から、拔摸補塡して西洋經濟學發達の概略を叙し、併せて之れが我が國傳來の跡を顧眄しようとしたものである。」（序文の一節）―斯くの如く、本書は希臘・羅馬の太古から、經濟學傳來の跡を辿つて、官房學者・重農學派の前驅的理論より、巨星アダム・スミス現はれてマルサス、リカアドオ、ミルの絢爛たる古典學派の開花となり、一方、初期佛蘭西のそれよりラサール、マルクスの科學的のそれに至る迄の社會主義を檢討して、講壇社會主義、基督教社會主義に及び、限界效用學派、墺太利學派、數理學派の三大學的財とそれを相續した現代經濟學に到り、終の一篇はフィッセリング以來の西洋經濟學の日本移植とそれの今日迄の發展を叙して筆を收めた。本文五五七頁、書名註一六頁、人名索引一一頁學界多年待望の高橋先生の一貫せる經濟學史は遂に出來た。

慶應出版社

三田學會雜誌　第四十一卷　第十號　昭和二十三年十月

論說

價値表現の兩極について

遊部久藏

小稿の課題とするところは簡單な價値形態における兩極の兩極としての意味をたずねるにある。それは「資本論」第一卷第一篇第一章第三節「價値形態あるいは交換價値」のAの二「價値表現の兩極、――相對的價値形態及び等價形態」を研究對象とする。原文（第二版以降）にしてわずか一頁半にもみたぬ部分である。しかしその價値形態論の上で有する意義が極めて大であることはこゝに述べるまでもあるまい。また以下の論述がそれを自ら明らかにするであろう。

一　兩極の意味

先ず我々は簡單な價値形態の考察に際して一般的に心得べき三つの眼目を掲げておく。

價値表現の兩極について

一　簡單な價値形態はそれに後續する一切の價値形態の諸規定をそれ自身の中に胚因としてもつている。

「あらゆる價値形態の祕密は、この簡單な價値形態のうちに潛んでいる。」（註一）「それは、謂わば細胞形態であり、ヘーゲルの語法を藉れば、貨幣の即自（das An sich des Geldes）である。」（註二）

またマルクスはエンゲルス宛一八六七年六月二二日附書簡でも次の如く述べている。

曰く「經濟學者先生達は、これまで次のような極めて簡單なことを看過している。即ち20ヱルレのリンネル＝1枚の上衣という形態は、20ヱルレのリンネル＝2枚の上衣という形態の未發展な基礎に外ならぬということ、かくして、最も簡單な商品形態――これにおいては、商品の價値は、まだすべての他の商品に對する關係としてではなく、たゞ、それ自身の自然的形態から區別されたものとして、表現されているにすぎない――は、貨幣形態の從つてまた一言で云えば勞働生産物のあらゆるブルジョア的形態の全祕密を含んでいるということ、これである。」（註三）

二　簡單な價値形態は商品に内在的なその二要因の外的展開である。それはいわば商品に含まれている對立の簡單な現象形態である。

「・・・商品のうちに包みこまれている使用價値と價値との内的對立は、一の外的對立によつて、すなわち、二つの商品の關係――そこでは、それの價値が表現さるべき一方の商品は直接には使用價値としてのみ意義をもち、それで價値が表現される他方の商品はこれに反して直接には交換價値としてのみ意義をもつところの、二つの商品の關係によつて、表示される。かくして、一商品の簡單な價値形態は、その商品に含まれている使用價値と價値との對立の簡單な現象形態である。」（註四）「換言すれば、この關係においては、使用價値および價値という二つの對立的規定が、二商品のあいだに對極的に分配されているのである。」（註五）

一

しからばいかにして商品の内的對立は外化するか？　蓋し内的對立の要因が矛盾しその結果統一物たる商品が自己運動を起すからである。通常この問題は次の如く簡單に解決されている。即ち商品はひとりあるきして市場にきて自分を交換させることはできない。こゝに我々は商品所有者の登場をみる。これ即ち交換過程論（第一卷第一篇第二章）の課題であると。しかしかくてはこの問題は商品にとつて外的に解決されてしまうこととなる。「發展は對立の『鬪爭』である。」（註六）我々は簡單な價値形態の成立を商品の二要因の内的對立の「鬪爭」の結果としての發展と解すべきである。商品所有者の登場はむしろ商品の自己運動による矛盾の解決に對して媒介的意義を有するにとゞまるであろう。（この點詳論は別稿に期す。）

三　簡單な價値形態が右に述べた如く商品の二要因の對立の展開であるから、商品の二要因の間にみられる對立及び矛盾の論理はそのまゝこの價値形態に關しても擴充されうる。

この點についてマルクスの次の一句は示唆に富んでいる。

「――もし私が、商品といてはリンネルは使用價値および價値である、と云うならば、それは、分析によつてえられた・商品の性質に關する私の判斷である。これに反し20ヱルレのリンネル＝1枚の上衣　あるいは、二〇エルレのリンネルは一枚の上衣に値する、という表現においては、リンネルはみずから、それが（一）使用價値（リンネル）であり、（二）これと異なれる交換價値（上衣と等一なもの）であり、且つ（三）かゝる兩差別の統一、すなわち商品であることを、語つているのである。」（註七）

この點を少しく解説しよう。

二〇エルレのリンネルは一枚の上衣に値するという交換關係において、いまかりに我々がリンネルの側に立つとし

より。即ち我々はリンネル所有者であるとする。（そして當面敍述の簡略上量的關係から引離れるとする。）リンネルは使用價値としてその獨自性をもつており、いわば自己との同一性にある。かゝる同一性にあるものとしてリンネルはまさにリンネル＝リンネルと、詳しくは20ヒヤヒのリンネル＝20ヒヤヒのリンネルなる等式を以て表わしうるであろう。これを稱して最も抽象的な同一性と云いうる。（註八）けれどもこのリンネルの自己同一性はそれが外的反省に基く單なる抽象的同一性にとゞまるものでないかぎり、當然區別を含んだものとなる。もちろん區別を外部にもつのでなくうちに有するのである。したがつてリンネルの自己同一性は自分自身以外のものとの、當面上衣との區別を内含しているのである。事實、商品の交換關係はこのことを示すであろう。即ち同一種類の商品同志の交換は意味をなさない。「私は、たとえばリンネルの價値をリンネルで表現することはできない。20ヒヤヒのリンネル＝20ヒヤヒのリンネルは何ら價値表現ではない。この方程式は、むしろ反對に、二〇エルレのリンネルは二〇エルレのリンネル、すなわち一定分量の使用對象たるリンネル以外の何ものでもないことを、語つている。だから、リンネルの價値は、たゞ相對的に、すなわち他の商品でのみ表現されうる。」（註九）

が、かくリンネルが使用價値として異る上衣と區別（不等性）の關係に立つことは同時に價値として同一性（相等性）の關係に立つことを意味する。かゝる同一性（相等性）の關係なしにはかの區別の關係もなりたゝぬ。こゝに（リンネルの上衣との）區別における兩契機としての同一性と區別との存在がみとめられる。簡單に云えば區別されたものとしてのリンネルと上衣とは使用價値の面においては不等、價値の面においては相等の關係にある。そしてこのような上衣との區別の關係を内に含むものとしてリンネルは自己同一性の立場をもつている。

リンネルと上衣とのかゝる關係はまさに區別、しかもそのうちでも單なる差別を超えた對立の關係にあり、ひいては矛盾の關係にあるのである。（註一〇）したがつてこれを根據として全價値形態の展開が可能とされる。蓋し「かゝる不斷の矛盾の定立と同時的なそれが解決とが、正に運動なのである。」（註一一）から。

さきに簡單な價値形態において商品の内的對立が外化すると述べた。これは換言すれば、簡單な價値形態の成立することによつてはじめて商品の内的對立が顯在化するという意味である。「上衣へのかゝる關聯によつて、リンネルは一擧數得をするわけである。それは、他の商品を自らに價値として等置することによつて、價値としての自分自身に關聯する。それは、價値としての自分自身に關聯することによつて、同時に自らを使用價値としての自分自身から區別する。」（註一二）

こゝで我々はマルクスが述べている價値表現の兩形態の對立の樣相について一言するにとゞめる。（註一三）

（イ）兩形態即ち相對的價値形態と等價形態との不可分離性（Unzertrennlichkeit）

兩形態は同じ價値表現の互いに從屬し合う・相互に制約しあう・不可分的な・二契機である。

（ロ）兩形態の對極性（Polarität）。

しかも同時に兩形態は互に排除しあう・あるいは對立させられた・兩極端すなわち兩極（Extreme, d. h. Pole）である。

相對的價値形態と等價形態とは、價値表現によつて相互に關聯させられるところの相異る二商品の上に常に自らを配分する。ある商品例えばリンネルは自分自身の價値を自分の體で表現することはできない。で、その相對的價値形態は、何かある他の商品例えば上衣がリンネルに對立して等價形態にあることを前提とする。一方、等價として登場する上衣は、同時には、相對的價値形態にあることはできない。それは自分の價値を表現するのではなく、他の商

品、リンネルの價値表現に材料を提供するにすぎぬ。

だから同一の商品は同一の價値表現においては同時に雙方の形態をとつて登場することはできない。これらの兩形態は「あたかも一個の直線の兩端の如く」（wie die beiden Endpunkte einer Linie）（註一四）對極的に排除し合うのである。

（八）相對的價値と等價とはともに商品價値の形態たるにすぎぬ。

20ヱルレのリンネル＝1枚の上衣と1枚の上衣＝20ヱルレのリンネルという二つの價値方程式はその内容においては全く相異がないがその形式からみれば相異するのみならず相對立していることは自明であろう。かくして同一の商品は同一の價値表現におけるその時々の位置によつてその價値形態を規定される。即ちその位置を變えることなしには同一の商品はその價値形態を變えることはできない。

右に述べた如き兩形態の不可分離性及び對極性が、根底において商品の内に含められた對立（商品の二要因及び勞働の二重性）によつて招來されたものであることは云うまでもない。

なおこゝで注意しなければならぬのは、マルクスは價値形態論の冒頭で商品の使用價値の形態は自然的形態であり、商品の價値形態は社會的形態であると述べているが（註一五）、この場合の商品の使用價値の形態とは單なる使用對象として價値關係から全く抽象されたものであることは云うまでもない。何故ならば商品の使用價値は交換價値の質料的擔い手として「歴史的獨自性」（註一六）すらもち、それ自身すぐれて「社會的使用價値」（註一七）であるから。だから云うまでもなく相對的價値形態にある商品（前例、リンネル）は決して使用價値として自然的形態にとゞまることなく社會的形態をおびているのである。蓋しそれは價値關係に現實的に捲き込まれているのであるから。

二　兩極の内面的交渉――或者と他者（Etwas und ein Anderes）

我々はさきに簡單な價値形態の兩極が對立の論理に服すということを指摘した。がこゝでまた我々は對立の論理とある内面的つながりを有する或者と他者との論理が當面の問題について參照となることについて一言したい。

云うまでもなく對立の論理は「大論理學」、第二卷本質論第二章本質性或は反省規定に屬し、或者と他者との論理は同じく第一卷有論第二章定有に屬している。ヘーゲルが次の如く述べているのは兩者の内面的連繋を示している。即ち彼は或者が即自有と向他有との二契機をもつ同一的存在であると述べてから（後述參照）、この同一性について言う。「この同一性は形式的には既に定有の領域内に現われている。（即ち或者と他者との論理として――引用者）しかしより明確な形では本質並に内面性と外面性の關係に對する考察、最も規定的な形では概念と現實性の統一たる理念の考察の中に現われる。」（註一八）いわば或者と他者との論理は對立のそれに比してより抽象的段階にあるものとみることができる。それだけにまた容易に把捉しがたいものをもつていると云える。しかしそれを通してかの兩極の關係を明らかにしてはじめてその本來の對立の意味も明らかにされるであろう。――なお以下の論述は武市健人氏の研究（註一九）からかなり示唆を得ている。但し解釋のすゝめ方はもちろん私のものである。

結論から先に云うと、或者と他者とにおける或者は簡單な價値形態における相對的價値形態に該當し、他者は同じく等價形態に該當する。したがつて以下述べられる或者と他者との論理の展開において絶えず讀者はこの對應を念頭においていたゞきたい。

一　或者と他者との存在樣式

(1)　或者と他者とは第一に定有するもの（Daseiende）即ち或者（Etwas）である。

兩者はそれ自身としては、何らの關係をもつことなく、たゞそれぞれ或者としての獨立性をもつているにすぎない。この狀態は例えば價値關係を結んでいるリンネルと上衣とを價値關係から全く抽象して考えた狀態と云うことができよう。

(2)　第二に或者と他者とは各々それぞれ他者（ein Anderes）である。

この場合、兩者のいずれを第一に或者と呼ぶかは任意である。「もし或る定有をAとし他をBとするならば、Bは先ず他者と規定される。しかしAはまた同樣にBの他者である。即ち兩者は等しく他者である。兩者を區別して或者を肯定的に定める場合には『此者』（das Dieses）という言葉が使用される。しかし此者という表現は明かにこの區別作用即ち一個の或者を採り出す作用が或者自身の外部に存する主觀の指示であることを語つている。そして凡ての規定性はこの外的指示の行う所である。」（註二〇）

かくして或者と他者との兩者は或者であるとともに他者であるものと規定され、したがつて互に同一であつて、その間には未だ何の區別も介在しない。がこの同一性は同時に區別を豫想しているとも云える。そしてかゝる同一性（及び區別）は單に外的反省、即ち我々の行う兩者の比較より云われるにすぎない。「が他者がこゝに先ず始めに措定されたような形においては、勿論他者はそれ自身或者に對する關係の中で他者となつているのであるが、しかしまたそれ自身或者の外に存在するのである。」（註二一）

さて我々は價値關係にあるリンネルと上衣とをこゝに見出す。そして價値關係にある以上、リンネルと上衣とは、いずれかが相對的價値形態（或者）にあり、いずれかが等價形態（他者）にある。がこの場合いずれを第一に相對的價値形態（或者）と呼ぶかは任意であると云いうる。いまリンネルを相對的價値形態（或者）と呼ぶならば、當然上衣は等價形態（他者）と規定される。しかるにこの規定を行うものはリンネルの外部に存する主觀である。即ち商品所有者の外的指示によつて行われる。（外的反省）即ちリンネルが相對的價値形態にあつて「此者」と呼ばれるのは、リンネル所有者によつてである。云うまでもなく逆の關係が上衣所有者にとつて成立する。上衣所有者にとつては上衣が「此者」である。即ち上衣が相對的價値形態（或者）と見做され、リンネルは等價形態（他者）と規定される。

かくしてリンネルと上衣との兩者は或者であるとともにまた他者であるものと規定される。したがつてこの兩者は互に同一であつてその間には未だ何の區別も存しない。がこの規定の同一性は外的反省によつて行われる。

リンネルと上衣との交換においてリンネルも上衣もともに相對的價値形態にあり等價形態にあると云いうる。しかしかゝる事柄の生ずるのは全くリンネル所有者及び上衣所有者という二人の異る個人にとつてであり、且つ20ヒとしてのリンネル＝1ヒの上衣　及び1ヒの上衣＝20ヒとしてのリンネル　という二つの相異る價値表現においてである。（これ蓋しまえに交換關係にある二つの商品中いずれが第一に相對的價値形態にあるかを決するものが商品所有者の外的反省によると述べた所以である。）

マルクスはこの間の事情を次の如く述べている。

「A（リンネル生産者――引用者）は、二〇エルレのリンネルは一枚の上衣に値すると云い、そしてB（上衣生産者――引用者）は、一枚の上衣は二〇エルレのリンネルに値すると云う。この場合には双方が、リンネルと上衣とが、同時に相對的價値形態に・および等價形形に・在る。しかしその然るのは――注意せよ――全く同時に出現するところの、二人の異なれる個人にとつて、および二つの異なれる價値表現において・である。Aにとつては、彼のリ

ンネルは、――蓋し彼にとつて、彼の商品が起動者（initiative）だから――相對的價値形態に在るが、これに反して相手の商品・上衣・は、等價形態に在る。Bの立場からすればこの逆である。かくして、同一の商品は決してかゝる場合にもやはり、同一の價値表現において同時に兩形態をとることはない。」（註二二）

即ちこゝに我々の見出すものも相對的價値形態と等價形態との對極性である。

かくして他者――等價形態はそれ自身或者――相對的價値形態に對する關係の中で他者――等價形態となつているが、しかもまたそれ自身或者――相對的價値形態の外に存在するのである。

で、我々はこゝから兩者の第三の存在樣式へ移行する。

(3) 第三に他者は孤立したもの、たゞ自己自身への關係の中にあるものとみなされねばならぬ。即ち抽象的に他者として存するものとしなければならぬ。

プラトンはかゝる他者を全體性の一契機と考えて一者に對立させて他者にある種の固有性質を賦與したと云われる。「それで、この全く『或者の外部にあつて』、それ自身獨立的なものであり、即ち他物そのものであるということは、同時に他面には、却つて『或物への關係において』それ自身他物である』という面を含んでいる。即ち他物は全く對立するものとして、却つて他面に關係の面、從つてまた統一の面を含んでいる。それは既に對立として統一であるという消極的統一をもつているのである。」（註二三）

したがつていままでのところ或者と他者とは對立として「消極的統一」を保つているにすぎない。この論理の段階にあるかぎり簡單な價値形態におけるリンネルと上衣とは向自的對立の段階にいたらぬのである。對立の論理はいまだこの價値形態の兩極にとつて充分構成的でないとも云えよう。しかるに次の二の段階にいたると兩極の對立は明瞭となる。がこゝで一（の(3)）より二にいたる移行をヘーゲルがいかに述べているかをみるとしよう。

曰く「他者は、これを向自的に見れば、それ自身における他者であり、從つてそれ自身の他者、即ち他者の他者である。故に絶對的に自己不等の存在、自己否定的存在、或は自己を變化せしめる存在である。けれどもそれは同樣にまた自己同等の存在として停まる。何となればこの他者が變化し行く所のものはまた他者であつて、この他者は他者という規定以上の規定を持たぬからである。そしてこの變化する存在は異なる仕方ではなく他者であるという同一の仕方で規定されている。故にそれは他者の中において唯だ自己と一致するにすぎない。從てそれは他在の止揚によつて自己に反省したところの存在、自己同一の或者として措定される。そして他在は同時にこの或者の契機であるが、またこの或者と區別されたものであり、それはそれ自身或者としてこの自己同一的存在に屬するものではない。」（註二四）

二　或者と他者との關係における二契機――即自有と向他有（Ansichsein und Sein-für-Anders）

さきに他者は孤立したものであつてしかも或者に屬しそれとの統一にあると述べた。この論理が發展して或者の二契機としての即自有と向他有とが見出されることになる。即ち即自有とは或者がそれ自身においてある面である。しかるに向他有は或者のうちに包含された他者である。ヘーゲルの規定するところをみるとしよう。

即自有（Ansichsein）・「定有そのものは自己の非定有の中に自己を保有する。したがつてそれは有である。しかしそれかと云つて有一般ではなく、寧ろ他者への關係に對峙する自己關係、或は自己の不等性に對峙する自己同等性としての有である。そしてかくの如き意味の有は即自有である。」（註二五）「・・即自有は始めは非定有に對する否定的關係である。それは他在を自己の外に保ち、これと相對立する。即ち或者は即自的である限り、それはその他在及

び向他有から引き離されている。しかし第二に即自有は又非有をそれ自身の中に保有している。何故と云うに即自有はそれ自身向他有の非有を意味するものであるから。」（註二六）

向他有（Sein-für-Anders）・・「或者はその非有（他者への變轉）の狀態の中に自己を維持する。それは本質上この非定有と同一であるが、しかし本質上これと同一ではない。即ちそれはその他在に對する關係の中に存し、純粹に他在それ自身であるのではない。他在はその中に包含されると同時になおそれと分離されている。即ち他在は向他有である。」（註二七）「・・向他有は始めは有の單純な自己關係――これは最初には定有または或者として現われるが――の否定である。即ち或者は他者の中に或は他者に對して存する限り、その固有の有を缺く。しかし第二に向他有は純粹無としての非定有ではない。寧ろその自己反省した有としての即自有を指示する所の非定有である。そして逆に即自有は向他有を指示している。」（註二八）

いまこの兩契機を簡單な價値形態について適用して考えてみると、こういうことになるであろう。

20ヒッツのリンネル＝1着の上衣　という交換方程式において、この兩邊のリンネル及び上衣はそれぞれその本來の姿にあるものとしては即自有である。しかるにリンネルと上衣との兩者はそれぞれ上衣とリンネルとの中に他者として包含されており、かゝるものとして向他有である。いまかりにリンネル所有者の立場に立てば或者たるリンネルは或者として即自有であり、しかもリンネルの他者たる上衣はこの或者を含む廣義の或者の中に包含されて向他有として存する。圖示すれば左の如くになる。（但しリンネル所有者にとつての圖示である。）

或者（リンネル）｛（或者（リンネル）即自有
　　（他者（上衣）向他有

他者（上衣）

同樣の關係が他者たる上衣についても成立する。蓋し上衣はまた商品所有者にとつては、或者であり、逆にリンネルが他者であるから。（後述參照。）

かくしていまや或者と他者とは即自有と向他有としてはるかにすゝんだ關係におかれることになる。「この向他有と即自有は或者の二契機を構成する。したがつてこゝに（一）或者と他者（二）向他有と即自有の二對の規定が現われる。第一のものは或者と他者の二つの規定の浚關係性を包含し、かくて或者は他者と分離する。しかしながら兩者の眞理はその關係に在る。玆に向他有と即自有はかの或者と他者という一對の規定が同一存在の契機として措定されたものに他ならない。即ちこの兩つの規定は關係であつて、その統一即ち定有の統一中に存在するのである。故にその各々はそれと區別された他の契機を同時にまたその中に包含している。」（註二九）

このことは當面の價値形態の兩極について如何なる意味を有するか？

我々は簡單な價値形態の方程式20ヒッツのリンネル＝1着の上衣においては相對的價値形態と等價形態とが兩邊として分離した姿であらわされているのをみる。けれどもこゝで我々が更に考をすゝめると、前掲の圖示にみらるゝ如く兩者の關係は共に内包し合つていることを知るべきである。方程式はこの點、兩形態の内面的交渉の仕方を示すのに適當ではないのである。それは單に＝（イクォール）の記號によつてむしろ外的に示されているにとゞまる。即ちリンネルはリンネル所有者にとつて相對的價値形態（或者）にある。そして上衣は彼にとつて等價形態（他者）にある。二つのものは分離し對立している。しかしこの分離し對立している二つのものは全然外にあつてそういう關係を結んでいるのではない。何故なら相對的價値形態にあるリンネルはそのまゝ即自有としてあるが、或者たるリンネルが即

自有としてあるということが實は他者たる上衣を向他有として自身に内包していることを意味するからである。同一の關係が他者たる上衣にとつても成立する。即ちリンネル所有者にとつて等價形態（他者）たる上衣は上衣所有者にとつては相對的價値形態（或者）として存する。そしてこの上衣が或者として即自有でありうるのは他者たるリンネルを向他有として自身に内包しているからにほかならぬ。かくして價値形態にあるリンネルと上衣とはそれぞれ相手方（他者）のうちに内包されているのであり、またそれぞれ相手方を内包しているのであり、いわばリンネルと上衣とはリンネル及び上衣のそれぞれの二契機（即自有及び向他有）として存しているのである。

或者と他者との關係においてはリンネルと上衣とは未だ分離されたかたちであらわされている。しかるに即自有と向他有との關係においては兩者は統一されたもの（同一存在の兩契機として措定されたもの）としてあり、かくしてその關係即ち對立――分離ではない――もより一層明瞭化する。

だからこゝで對立の論理を援用すると、右の論述は讀者の一層理解するところとなるであろう。即ち相對的價値形態としてのリンネルのうちに等價形態たる上衣が内包されているということは判りにくいかもしれない。けれどもリンネルと上衣とが價値關係にあるものとしては同一性の關係にあるということ（これを具體的に示すものが外ならぬ20ヒヤヒヤのリンネル＝一着の上衣の（價値）方程式である）を想起せよ。兩者（二〇エルレのリンネル及び一枚の上衣）が區別されるのはあくまで使用價値としてである。このような意味でひろく兩者の區別と呼ばれる關係のうちには右の如き同一性と區別との二面が兩契機として内含されていると云える。「それ故に區別は區別自身であるとともにまた同一性である。即ち區別と同一性との區別が合して區別を構成しているのであつて、區別は全體者であるとともにまたその契機である。――同様にまた單純な區別としての區別は區別ではないと云いうるであろう。寧ろ區別は同一性に關係して始めて區別たりうるのである。或は寧ろ區別は區別であるが故に同一性及びそれへの關係自身を包含しているのである。――同一性がその全體であるとともにまたその契機であるのと同様に、區別も全體者であるとともにまたそれ自身の契機である。――そしてこの事實は反省の本質的な性質として、凡ての活動性及び自己運動の規定的な根源と見做さるべき事柄である。」（註三〇）最後の一句に注目せよ。こゝに即ち簡單な價値形態の兩極のかゝる區別の定立のうちに我々はそれに引續くいくつかの價値形態の展開の「規定的な根源」を見出すべきである。

なおこの際、簡單な價値形態が實は商品の二要因の外化であるということを想起せよ。即ち等價形態たる一枚の上衣は二〇エルレのリンネルの價値の外化したものであつて、したがつて簡單な價値形態の一極たるそれは商品の二要因の一の現象形態でしかない。等價形態（他者）が相對的價値形態（或者）のうちに内包されているという判りにくい表現もこの根底における同一性から理解されうるであろう。（二〇エルレの）リンネルは使用價値であるとともにまた價値でもある。このような二要因の統一としてあるリンネルがいま單なる使用價値の實存形態として換言すれば相對的價値形態として存するならば、一方の要因である價値はそれより自己疎外して自己の實存形態を等價形態たる（一枚の）上衣のうちに見出さざるをえない。だからこゝに相對的價値形態と等價形態との一なること（統一物たること）は要するに初發における使用價値と價値との、一なること（統一物たること）のうちにその前提を有しているとも云える。

さて我々は或者と他者との論理としてもう一の段階を有している。だが我々は價値形態の兩極の考察においてすでにこの段階に足をふみ入れていることに氣付くであろう。したがつて第三の段階については簡單に論述するにとゞめる。

三　兩契機の同一性

我々はさきに或者と他者との關係についてすゝんで卽自有と向他有との對立をみ、しかも對立（否定）がそのまゝ關係として、統一であること、卽ち兩者が或者の契機であることをみた。

この事實を基礎にして、卽自有と向他有との同一性が成立する。「・・・卽自有と向他有は始めは互に區別される。しかし或者はその卽自をなす所のものをまたそれにおいて持ち、また逆に向他有として存する所のものが同時に卽自的である。この事實は卽自有と向他有との同一性を表わすもので、これは或者それ自身がこの二契機を含む同一的存在でしたがつて二契機は或者の中に非分離的に存在するという規定に基く。」（註三二）

さきに簡單な價値表現における相對的價値形態と等價形態との卽自有及び向他有としての或者における統一＝同一性について述べたところであつて、いまこれについて贅言を要しまい。ともかく卽自有と向他有とが同一性たることが明らかにされて、こゝに兩者の統一は積極的なものとなつたと云いうるであろう。かくして或者と他者との關係はいまや或者における統一としてそのまゝ或者の規定となる。

「或者の自己統一の中においては向他有はその卽自と同一となつている。故に向他有は或者においてある。そしてかくの如く自己へ反省した所の規定性は再び單純な存在的のものとなる。卽ちそれは再び一個の質――規定となる。」（註三三）

こゝで「大論理學」第一卷第二章Bの(a)或者と他者との論述はおわる。同時に我々の簡單な「價値表現の兩極」の考察も終えてもよさそうである。がこの一見自明であるかのような兩極の兩極性をいま述べた如き廻りくどい表現を以て何故あきらかにしなければならなかつたかについて一言しておきたい。

我々はかの兩極が對立の論理に服しまたその根底において當然或者と他者、卽自有と向他有の論理を前提するということについて述べたが、それは同時に商品の二要因の外化である點において後者に固有の對立の論理の發展であることをもみたのである。

こゝで我々は敢えて設問する。

簡單な價値形態は歷史上の先資本制商品の論理であるか？　と。

「資本論」の解說者はすべてかく解し、簡單な價値形態よりその後の價値形態への發展の論理を以て商品形態の歷史上の發展と卽應させている。そして曰く「これ卽ち『資本論』における論理的なものと歷史的なものとの統一である」と。だが別の機會に明らかにした如く（註三三）「資本論」劈頭の簡單な商品の價値規定はあくまで資本のロゴスである。商品の二要因の對立ということがすでにこれを示している。とすればかゝる對立の外化の自己運動である價値形態の展開がまた資本のロゴスであるべきは理の當然であろう。がこのような私見はおそらく從來の「資本論」解說者にとつて惑耳驚心の一大事なるであろう。いまこゝにこれを詳論しえないのは遺憾であるが、別の機會にこれを期さねばならない。小稿はむしろこのような意圖をふくみつゝ簡單な價値表現の兩極の意味をたずねたにとゞまる。

（註一）「資本論」第一卷、エンゲルス第一〇版、一五頁。
（註二）同、第一版、二八頁。譯、五二頁。（原文は青木書店刊再刻版、譯文は岩波文庫版、長谷部氏譯に據る。）
（註三）M・E全集、第一九卷、三七五頁。
（註四）「資本論」、二八頁。譯、二二九――三〇頁。
（註五）同、第一版、一三五頁。譯、一六四頁。
（註六）レーニン著、廣島・直井兩氏譯「哲學ノート」、三四二頁。

（註七）「資本論」、第一版、一三五頁。譯、一六四頁。
（註八）三枝博音氏著「資本論の辯證法」、八九頁の註四七。
（註九）「資本論」、一五頁。譯、二〇一頁。
（註一〇）區別における差別、對立、矛盾の諸段階について、は、「大論理學」第二卷第一篇第二章參照。その簡單なる解說と價値論への適用は「商品の二要因の對立について」（拙著「値價論爭史」所收）參照。
（註一一）「反デューリング論」、M・E全集、第一二卷、二九九頁。
（註一二）「資本論」、第一版、三〇頁、譯、五三頁。
（註一三）同、一五——六頁。譯、二〇〇——二頁。第一版、一〇七——一一頁。譯、一三七——四一頁參照。
（註一四）「資本論」カウツキー版、一六頁。この句はカウツキーの附加語。
（註一五）同、一四頁。譯、一九八頁。第一版、一〇五頁、譯、一三五頁參照。
（註一六）同、アドラツキー版、八四八頁。
（註一七）同、四五頁、譯、一八四頁。
（註一八）「大論理學」、グロツクナー版全集第四卷、一三六——七頁。鈴木權三郎氏譯、上卷、一七六頁。
（註一九）武市健人氏著「ヘーゲル論理學の世界」上卷、三三一頁以下。
（註二〇）「大論理學」、一三二——三頁。譯、一七〇頁。
（註二一）同、一三三——四頁。譯、一七一頁。
（註二二）「資本論」、第一版、一〇九頁。譯、一三九——四〇頁。
（註二三）武市氏、前揭書、三三四頁。
（註二四）「大論理學」、一三四頁。譯、一七二——三頁。
（註二五）同、一三五頁。譯、一七三——四頁。
（註二六）同、一三六頁。譯、一七五頁。
（註二七）同、一三五頁。譯、一七三頁。
（註二八）同、一三六頁。譯、一七五頁。
（註二九）同、一三五頁。譯、一七四頁。
（註三〇）同、五一六——七頁。譯、中卷、六四——五頁。
（註三一）同、一三六頁。譯、一七六頁。
（註三二）同、一三九頁。譯一八〇頁。
（註三三）拙著「價値と價格」第二章參照。

論說

經濟的價値の概念

——價値論序說——

千種義人

一　價値概念の發展

經濟學の中心課題が經濟的價値の究明であることはいふまでもない。然し經濟的價値とは何であらうか。われわれはこの言葉を如何なる意味に用ひるべきなのであらうか。もしこの言葉に種々の異つた內容を與へることが可能であるとするならば、それぞれの內容に應じてそれぞれ別個の價値論が成立し得ることにならう。事實これまで經濟的價値は種々の意味に定義され、各々の定義に相應する各種の價値論が展開されて來たのである。その結果、價値概念は全く混亂し、價値論は相對立し、遂には價値論無用說までも現はれるに至つた。今日各種の經濟學が存在する理由も價値概念のこのような差に求められるであらう。そこでわれわれにとつて何よりも必要なことは、經濟的價値を如何に定義すべきかといふことである。この定義に應じて經濟的價値論の體系は自ら決せられるであらう。

先づ順序として價値概念の發展をたどり、それら諸概念が至當かどうかを吟味することから始めねばならない。

價値概念の混亂とそれをめぐる諸論爭の根源は、アダム・スミスの價値概念の曖昧さから出發する。スミスによれば、價値いふと言葉には二つの意味がある。即ち或時はある特定物の效用を表はし、或時は他の貨物を購買する力を表はす。前者を使用價値、後者を交換價値と呼ぶ。ところが最大の使用價値を有つものでも、往々にして交換價値を殆んど又は全く持たないものがある。これに反し、最大の交換價値を持つものでも、往々、殆んど又は全く使用價値を持たないものがある。水ほど大切なものはないけれども、これを以つて何物をも買ふことはできない。然るにダイ